

永井道雄著

日本の大学

産業社会にはたす役割



中公新書

61



中公新書 61

永井道雄著

日本の大学

産業社会にはたす役割

中央公論社刊

永井道雄 (なかい・みちお)

1923年(大正12年)東京に生まれる。1944年、
京都大学文学部卒業。1952年、オハイオ州
立大学ドクター・オブ・フィロソフィー修
得。東京工業大学教授、文部大臣を経て、
現在、朝日新聞社客員論説委員。上智大学
教授。専攻、教育社会学。

著書『教師—この現実』(編著、三一新書)

『試験地獄』(編著、平凡社)

『新教育論』(中央公論社)

『文部省と日教組』(中央公論社)

『大学の可能性』(中央公論社)

『近代化と教育』(東大出版会)

『福沢論吉』(編著、中央公論社版「日
本の名著」33)

『歴史と国家』(中央公論社)

訳書 T・パーソンズ『行為の総合理論を
めざして』(日本評論新社)

ロバート・ハッチンス『教育と人
格』(監訳、エンサイクロペディア・
ブリタニカ社)

日本の大学

中公新書 61

© 1965年

検印廃止

定価 400 円

昭和40年3月5日初版

昭和56年2月10日31版

著 者 永井道雄

発行者 高梨 茂

本文印刷 三陽社

表紙印刷 トープロ

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7

振替東京2-34

はしがき

日本の大学で働くものの一人として、ここ数年間、私の頭を去らないのは、大学の現状はこれだよいかということである。教育の内容も充実していないし、大学や学生の数が多いわりには、世界的な研究の成果に乏しい。そのほか、人事の面での学閥主義、研究教育計画の不足など、眼につく欠点はあまりにも多いのである。

他方、私はここ数年、幸いに機会を得て、アメリカ、ヨーロッパ、ソ連などを旅し、外国の大学を見ることができた。アメリカの大学では学生として学んだこともあり、のちにアメリカのロンピア大学、イギリス系の香港大学で教える機会もあった。この間、見聞し、体験した外国の大学にくらべると、日本の大学の現状は非常に悪い。事実にもとづいてこれを明らかにすることが必要であるという考えが強くなるばかりであった。

ところが、いよいよその仕事にとりかかってみると、そのむずかしさを痛感しないわけにはいかなかった。ひとくちに日本の大学というが、その数は多く、内容は多様である。また一つの大学を取りあげても、研究、専門教育、教養などの異なった機能や、教師、学生の生活、運営の問題など数多くの側面がある。これらの事実を取りあげながら、しかも全体的に把握し、外国との

比較を通して日本の大学の性格を明らかにするのは容易ならぬことなのである。

この課題にとりくむには私の能力はいかにも乏しい。けれども、多くの欠点があることを承知しながら、一つの試みとして、「日本の大学」と題する本を書くことにしたのは、現状打開の一つの捨て石として役立ちたいと考えたからである。そこで、私は、この本のなかで、単なる事実のよせ集めよりも、一方では歴史的観点、他方では外国との比較の観点を生かして、全体的な性格を明らかにすることにつとめた。

予定よりは長く一年半以上にわたって少しずつ執筆したが、幸いこの間、大学問題が私の生活の大部分をしめた。勤務先の東京工大では、他の大学の評議員にあたる運営委員をつとめたので、大学全体について考えることがまさに私の仕事であつたし、他方、『朝日ジャーナル』の連載「大学の庭」の執筆に参加したことも見聞をひろめるのに少なからず役に立った。それにもかかわらず、私が書いたことには偏りもあるうし、重要な事実についても書き足りない点があるかと思う。読者の御叱正を得たい。同時に、大学再建の急務をもう一度強調しておきたい。

終りにこの本ができるまで協力していただいた多数の方々、とりわけ、東京工大の同僚、埼玉大学の山村賢明氏に感謝の意を表したいと思う。

昭和四十年二月

永井道雄

目次

I 大学の現状

繁栄のなかの危機

工業化社会の大学

日本の大学—その特色

3

4

8

14

I 大学の歴史

創設期（明治—大正初期）

国家の大学

私学の誕生

大学の変貌

拡張の時代（大正七年—第二次大戦）

膨脹の時代（占領期以後）

II 大学の役割

研究—模倣から創造へ

模倣による経済成長

模倣文化の性格

創造の条件

65

55

45

34

26

25

76

69

66

IV

二つの文化

専門教育

三つの問題点

米ソの専門教育

ゆがめられた競争

専門教育の強化

教養——人間形成

教養とは何か

解放の教育

世界のなかの日本

教養課程の強化

再建への道

問題の所在

自治と計画

再建のための提案

参考文献

大学年表

付録図表

日本の大学

I

大学の現状

繁栄のなかの危機

日本の大学は繁栄しているのか、それとも危機に直面しているのだろうか。

大学と学生の統計上の数という表面的な現象だけをみれば、日本の大学は明らかに繁栄している。一九六九（昭和44）年度の『文部統計速報』によれば、四年制大学の数が三七九、その学生数が一三五万五千人、ほかに四七三の短期大学とその学生二六万三千人を加えると、大学総数八五二、学生数一六一万八千人に達する。アメリカの二一八三校、学生数五五二万人（一九六五年）、ソ連の一六〇〇校、学生数三八六万人（一九六五年）につぐ世界第三位であり、数に関するかぎり、日本の大学は世界屈指の繁栄をほこっている（巻末の「付録図表」参照）。

けれども、日本の大学が、少なくとも日本の大学史上、もっとも深刻な危機に直面していることもかくれもない事実である。

大学にとって最も基本的であり、しかも単純な「大学とは何か」という問いを発してみよう。人々はとっさにこの問いに答えることができない。ようやくたどりつく答えはあまりにも多様であり、しかも整理されていない。

ある人は、何といっても「真理の探究」こそ大学の使命だという。しかし、百万人にちかい青

年男女が本当に真理の探究にうちこんでいるだろうか。そこでつぎの人は、大学とは「専門家の養成」にたずさわる機関だ、いや、もっと広くいえば、「サラリーマンの授産場」だと考える。けれども第三の人によれば、大学はそれにつきるものではない。戦後の大学が教養の課程を必修にしていることから明らかであるように、大学は「教養」をおさめ、「人間の形成」をうながす組織でもあるはずである。

「大学とは何か」という問いを別の角度から考えてみよう。今日の大学は戦後に発足した新制のそれである。それでは新制大学とは何であろうか。それが「旧制大学とは異なる」という消極的な規定はできるが、積極的な意味は必ずしも明らかではない。かりに新制大学という一般の問題をはなれ、私が教え、あなたが現在学んでいる、あるいは過去に学んだ特定の大学について具体的に考えよう。

毎日、大学にゆくのは何のためか。大学で私やあなたはなに打ちこんでいるのだろうか。

不幸なことに、今日の日本ではこれらの問いに対する答えが明らかではなく、混乱が全体を支配している。教師と学生がそこに結集して生活をかける学園がない。学生の多くは大学に籍をおくことに満足し、教師もまた大学を講習会のように考えることが少なくない。数に関するかぎりは繁栄している、けれども繁栄の外装はおとし穴だ。おちこんだ穴にまちうけているのは、大学の危機であり、転落である。

それは世界的な現象であり、日本にかぎられているのではなからう——読者のなかには、このように反問する人もあるだろう。しかし、私が見るところでは、これは今日の日本に特有な現象である。理念が明確を欠き、それにともなつて現実もまた充実していないのが日本の現状なのだ。こころみに、私立大学の財政状態をみると、一九六三（昭和38）年度の総経費、八七四億円のうち、純粋な研究費とみられるものは、わずかに八〇億円たらず、全体の九%にすぎない。しかも、私大の教師の数は、国立大学が学生八人に対して一人なのに対して、二九人に一人にすぎないから、教師は、予算の面でも、時間的にも教育に忙殺され、充実した研究を行なうことができない。しかも肝心の教育であるが、一九六九（昭和44）年度の募集のとき、私大の定員は一四万八七八〇人と発表されているのに、実際の合格者数は二五万六九七七人、全国平均で、実に一・七倍の水まし入学を行なっており、学生が全部出席すれば教室に収容しきれないことは、多くの大学で常識にさえなっている。

国公立の大学の教師の待遇は私立よりは恵まれている。研究費もはるかに多い。けれどもそれは、日本国内の比較論であつて、ただちに国公立大学が安心してよい状態にあることを意味するのではない。私が欧米の大学を訪ねて、あらためて痛感するのは、欧米の学者にとって、大学は文字どおりの「職場」であることだ。ところが、統計が示すところによると、日本では、国立大学の場合でさえ、教授の六六%、助教授の五三%が、所属大学以外に職をもっており、兼職が普

通と考えられるほどである（服部英太郎編『科学者の生活と意見』）。

社会的な需要をさけることができない場合もあろう。けれども、兼職の重要な理由が、一つには待遇、また一つには研究費の不足にあることは、理工系大学の若手研究者の企業所属研究所への転出、海外の大学への流出がおびただしい事実を見れば明らかである。とくに日本の学問的水準がたかく、しかも比較的、言語上の障害をともしない数学者のあいだでは海外流出の傾向が、つよく、科学技術白書（昭和四十三年版）によると、アメリカへ移住した日本の科学技術者は、技術者が六七人、科学者四八人、医者が四三人にのぼる。

日本の国立大学の教師たちは決して非愛国的ではない。職場に奉仕することを嫌っているのではない。大多数の学者にとって、生活上の不安になやまされず落ち着いて研究と教育にうちこむことは、本望であるばかりではなく、喜びでさえある。ところが、今日の日本ではそれもできない。研究費も不足である。これが私立と比較すれば理想郷のようにいわれる国立大学の現状なのである。

教師が安心して職場に定着し、学生がその指導をうけることは大学成立の最低の条件である。今日の日本では、この最低の条件さえもが満たされていない。してみると、旧制の歴史をもつ国立大学と、新制のそれとの差、他方、国立、公立、私立の差も、世界的な規準にてらして考えればそれほど大きくはない。コップのなかの嵐である。大学が混乱し、強化充実の動きが遅々と

していること、しかも長期的計画にもとづいて責任ある再建を行なう主体を欠いている点で、すべての日本の大学は同じ問題をかかえている。

工業化社会の大学

日本の大学の現状は深刻である。そして現状をまねいたのは、主として大学の拡張にもなる混乱であることは疑いない。それでは、ふたたび大学の規模を縮小し、昔にもどすことによって問題は解決するのか。——かつての大学のイメージにとられる人たちは、これだけを唯一の活路と考えるかもしれない。しかし、大学の規模の拡大は逆転することを許さない歴史的勢いである。

日本よりもはるかに早く、大学の拡張に関して世界に先がけたのはアメリカであった。しかし、それはアメリカにとどまる変化ではなかった。ソ連で、またヨーロッパで社会の工業化にもなつて、ここ数十年、大学は拡張の一路をたどった。拡張にもなる混乱もまたこの国でもさけることができない勢いであった。しかも混乱は、しばしば大学のイメージの喪失をまねいた。アメリカの政治学者ハロルド・ラスウェルが、「社会を部分的に包含することによって負わされた制限」*Limitation by partial incorporation* という巧みな表現によって今日の大学を特色づけ

1 大学の現状

ているように、大学は、社会の工業化という巨大なプロセスにまきこまれ、社会に接近するにしがたがって、いつのまにか社会によって新たな足枷をはめられることになった。

けれども、混乱が深刻ではあっても、これを意識的に把握し、計画的に大学の再建を考えれば活路を開くこともできる。ヨーロッパで、アメリカで、またソ連で、大学が、過去の貴重な財産を継承しつつ、ともかくも前進をつづけているのは、それぞれの国が、問題の重要性を認識し、計画的に再編成の道を歩んでいるからである。

これに反して、日本では、大学の混乱さえもが人々によって十分に自覚されてはいない。ましてや責任ある長期計画はまったくない。多くの学者と学生の犠牲において、大学は拡張の一路をたどり、混乱はそのままに放置されている。日本の現状が危機的なのは、混乱それ自体よりも、混乱についての的確な歴史的認識にもとづいた責任ある計画とその実行を欠いているからである。イギリスの教育学者A・H・ハルゼーは、この混乱を、大学の歴史的変遷、とくに二〇世紀に入ってから急激な変化に帰している。ハルゼーによると、西洋の中世から今日まで、大学の発展はこれを三期にわけてみることができる(A・H・ハルゼー編、清水他訳『経済発展と教育』)。

第一期は、西洋の中世から産業革命まで。世界的に著名なヨーロッパの伝統的な大学である、イギリスのオックスフォード、ケンブリッジ、ドイツのハイデルベルヒ、フランスのソルボンヌ、また、アメリカのハーバード、エール、コロンビアなどはいずれも、この時期に生れた大学であ

った。

この時期の大学は、文字どおり、世俗をこえた象牙の塔であり、少数の知的エリートが真理のために真理を探究する場であった。ところが、産業革命をへて、社会に急激な変化がおけると、大学も、その例外であることはできなかった。真理のための真理よりも、次第に実用の学である技術が重んじられ、大学は、専門的職業教育の場となったが、この変化は、ヨーロッパよりも、むしろアメリカで鋭い形をとった。

大学の実質は、このように第二期に入ると、かなりの変化をとげているが、ハルゼーによれば、この時期には、いまだに大学のイメージには急激な転換も混乱も見られない。この時期に代表的な大学論を書いたマックス・ウェーバーの主張も、第一期の伝統をつぐものであり、真理のための真理を探究する自治の組織という基本的な原則は維持された。しかし、ハルゼーがとくに強調するのは、二〇世紀に入ってから起こった技術革新という第三期に対応した、眼をみはるばかりの大学の急速な変容である。

世界の工業諸国家で、大学の規模は飛躍的に拡大した。産業革命期以前には大学にふくまれてさえいなかった工学が、むしろ主流となり、科学を加えた、いわゆる理工系学生が約半数をしめ、他方、文科系学生も、少数の知的エリートであるよりは、ホワイト・カラー予備軍となった。大学の門戸は女性にも開放され、大学は職業教育とともに、一般教養を学習するための国民教育機